

# ～日置町の歴史探訪 ①～

## 日置町の地名の由来



### はじめに

郷土の歴史を知ることとはとても大切なことだと思えます。そこで日置町内の史跡や伝説を尋ねることに致しました。然し、確かな文献が残されているわけでもなく僅かな資料に基づいて考察を加えながら記述したいと思えます。時にはフィクション(虚構)もあるでしょう。予めご了承いただきたいと思えます。

文責 岡藤正作

地名の由来についてはどこでも諸説が多く定説は少なく日置という地名もその例外ではありません。いく説かご紹介しますと、

○「貴布禰社伝の中に日輪の形御降臨ありしより日置と唱へ申候由相見え候へどもいか可有御座哉云々」(風土注進案・天保年間の毛利藩への上申書)となつてゐる。堀田貴布禰神社の神霊は泥土煮尊、他二神が祀られている。その社伝によると孝徳天皇の大化五年九月十七日(西暦六四九年)に「三つの日輪高尾山の頂きに降り大空の光を奪う。かくすること三日に及びその夜村人の枕上に老翁が立ちて「我は天神泥土煮尊にして、今この山に降れる日輪なり。他の二つの日輪は即ち兄弟なり。

我らを貴布禰大明神として崇めよ。永く国民を守らん」と告げ夢覚たり、依て此郷を日置と名づく」と云々」とある。

○奈良時代は大和朝廷が国家を統治し、中央集権政治を行い(律令制度)、この長門地方も郷が置かれた。然し、その時代より遡り古代には豪族日置部なる者が居住していたと考えられる。それにより部族名に係り日置となつた。古代にあつての日置部の先祖は九州筑紫地方の発祥とも考えられる(渡来人か)。日常生活の必需品の供給の他当時の最新の技能を持ち司雨の(天文、雨水を司さる)日神祭(太陽神)など独特の祭祀儀礼を司つた一種のエリート集団が徐々に移動し後に大和朝廷の尖兵的作用を果したのでないか。滋賀県の石山寺の寺宝(国宝)とされる「周防国玖珂郡玖珂郷戸籍残巻」がある。これは延喜八年(九〇八年)の戸籍で写経の裏紙(実は写経の方が裏)に人別等が記載され租税の基礎をなした庚申年(七六〇年)の戸籍である。日置部なる者が十九人おり一般人としても相当数が居住していたことになるが既に時代も下り荘園整備が行われていた時でもある。

○「日置は戸置にてそのかみ国々

に人を遣して民の戸数を記し置かるることありて其の職に任ぜられたる人を戸置といひ其の部を惣て日置部といひけむ」(防長地名淵鑑)これはまさに律令制度の日置部をさしている。

○浄火を常置しこれを管理する集団説。いわゆる「消えぬの火」や「火継ぎの神事」にかかわつた者として後に宮廷で油火と蠟燭の供給を受けて持つたとする。(民俗学)これらの者が何らかの係りをこの地域でもつていた。

○「日置とは四方に山を囲み、あたかなる事日を置くが如くなり依て日置と申し伝えている」(防長地下上申書)の地形説

このように日置という所、古代よりかなりの要所であつたことがうかがえる。さて、どの説をとるか確かなものはないが日置部に係る説が有力ではあるまいか。ちなみに全国で市町村名としてはここ日置町のみである。ヘキ、ヒオキ、ヒキという地名は全国で二十五ヶ所ばかり数えられる。しかも奈良大和から見て辺境の地に多いことも当時の大和政権の支配圏によるものと推測されるが太古の人々の太陽神・火神の呪術的なロマンを求めるところではないだろうか。